令和3年度

布教羅針盤

ふきょうらしんばん

凡人報土―救われていく道

宗祖のみ心

浄土宗

令和三年度　布教羅針盤

凡入報土――救われていく道

宗祖のみ心

はしがき

ネスレ日本の前社長・高岡浩三氏がある対談で「マーケティング」と「イノベーション」について語っておられました。

マーケティングとは顧客の問題に焦点をあて解決すること。そして顧客の問題には二種類あり、一つは調査をすれば分かるような問題で、それを解決するのはリノベーションといい、商品の改良のようなもの。そして顧客が問題だと思ってもいないことや、解決できないと諦めていることに気づき、それを解決することがイノベーションである。そう持論を展開した上で、イノベーションを起こす方法について「常に新しい現実を見ること。そしてその現実が、どんな新しい問題を連れてくるのか考えること」と締めくくられました。

今から八五〇年前。自らの力によってさとりを目指す教えが主流だった時代、それを大きく変えた人がいました。私たちの宗祖法然上人であります。それまでのさとりを目指す仏教から、救いを求める仏教へ。まさしく我が国の仏教イノベーションといえます。

法然上人が切り開いた「全ての人が救われる仏教」とは何か。それを知るために、布

教羅針盤では「凡人報土――救われていく道」という布教方針に沿って、平成二十九年度より四回にわたって伊藤唯眞猊下に御教諭を賜り、曽根宣雄、伊藤真宏の両師に御教示をいただき、布教師諸上人の実演を交えながら法然浄土宗の根幹を成す所求（しょぐ）・所帰（しょき）・去行（こぎょう）について改めて学んで参りました。お気づきのように所求である極楽浄土を説けば所帰と去行を語らねばならず、所帰である阿弥陀仏を説けば所求と去行に触れないわけにいかず、去行である口称念仏を勧めるには所求と所帰を根拠として示さねばなりません。それぞれ年度を分け、冊子を分けて示すことが難しい、どれを欠いても浄土宗で無くなってしまうという宗義の基本であります。

当然とも言える基本を、なぜこの開宗八五〇年を目前とした時期に改めて学び直す必要があるのでしょうか。

私はこう捉えております。まさに開宗目前の若き法然上人に想いを馳せるためではないかと。誰もが救われる道を求めて、諸宗の教門にあたるも得られず、有名な高僧を尋ねても得られず、経蔵に籠もり釈尊の一切経を五遍開き見ても見つからず。それは開宗数年前、信念を持った若き法然上人が答えを見つけることができず苦悩されるお姿、今からちょうど八五〇年前のお姿です。

そして一筋の光明が差します。善導大師のお言葉「一心専念弥陀名号行住坐臥不問時

節久近念念不捨者是名正定之業順彼仏願故」に出会ったのです。その喜びはどれほどのものであったでしょうか。日本仏教史に燦然（さんぜん）と輝く仏教イノベーション「全ての人が救われる仏教」の幕開けであります。

ただ、我々は法然上人の苦しみや喜びを知ってはいますが、体験しておりません。体験していないからこそ、我々は何度でも法然上人のみ教えに立ち返らなければならないのです。

本号はいよいよ布教方針である「凡入報土――救われていく道」をテーマとしております。「我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり」法然上人が我々全浄土宗教師に示してくださったみ教えです。それを受けて我々は「誰もが救われる道」を法然上人と同様に人々に示すという使命が与えられているのです。

冒頭でイノベーションという言葉を取り上げました。現代は新しければ良いというような風潮を感じることがありますが、どれほど新しいものでも、昔から続くことの積み重ねからできています。

「温故知新」という言葉を思い返してください。「昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ること」という意味であります。大切なのは、闇雲に新しいことを追い求めるのではなく、原点に立ち返ったり、根本をよく理解した上で、現在未来

に通じる知識や見解を生み出すことです。現代はＳＮＳなどを利用し発信が容易な時代であります。寺院の掲示伝道も世間の注目を浴びております。僧侶個人の個性が発揮しやすい環境が整っております。すばらしい発信が想像数以上の人々の心を動かすこともあるでしょう。逆も然りで、一人の軽卒な発言がとんでもない事態を招くこともあり得ます。だからこそ法然上人のみ教えに立脚した行動理念・布教姿勢を整える時なのです。その上で前述の高岡氏の言葉「常に新しい現実を見ること。そしてその現実が、どんな新しい問題を連れてくるのか考えること」の視点を持ち合わせる人材が、浄土宗教師の中から多数誕生することが期待されます。

浄土宗開宗時、法然上人は四十三歳でありました。開宗八五〇年の先の未来を担うのは、今は若き世代です。宗や本山、教区の役職、布教師、法式、詠唱、開教区など宗内で活躍を求められる場はたくさんあります。またこれからの時代は宗を背負って、宗外に対し積極的に発信していく時代にならなくてはいけないと思います。宗内宗外各方面に若き力の躍進が起こることを祈念しております。

合　掌

令和三年四月

浄土宗宗務総長　川中光教

●布教方針●

テーマ「凡入報土――救われていく道」

我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり。

（『法然上人行状絵図』六＝『聖典』六・六五頁）

私が浄土宗を立てた意趣は、凡夫が阿弥陀仏の報土に往生できることを示すためである。

（浄土宗総合研究所編『現代語訳　法然上人行状絵図』より）

法然上人のこのお言葉（心）が、我（法然上人）から我々（全浄土宗教師）に与えられたと認識したとき、全浄土宗教師の行動理念たるものと考えます。すなわち、「示さむ」という意志に基づく自行化他の行動、教化活動こそが浄土宗教師のつとめでありましょう。

令和六年に浄土宗開宗八五〇年を迎えます。本宗の布教方針は、約八百五十年前に法然上人が専修念仏の法を確信し、やがて世に布教されたように、開宗の教えである「ただひたすらに称名念仏を修する専修念仏」を伝えることにあり、その行動指針は「凡夫の報土に生まるることを示す」ことに尽き、法然上人のご法語を通じ、救われていく道を布教することであります。

この布教方針は、『二十一世紀劈頭宣言』（愚者の自覚を・家庭にみ仏の光を・社会に慈しみを・世界に共生（ともいき）を）に活かされているとおりです。

浄土宗の理想とする教師像は、寺院にて、社会にて、人々の集うところで、さまざまな所で、さまざまな機会に、「立教開宗のこころ」を伝える人であります。

◎目　次◎

はしがき……浄土宗宗務総長　川中光教　2
布教方針……6
教　諭……浄土門主　伊藤唯眞猊下　11
第1章　宗祖のみ心
凡入報土について……大正大学教授　曽根宣雄　16

第2章　宗祖のご法語をいただいて

一、我が身わろしとても疑うべからず
……岩手教区　吉祥寺　武田眞和　54

二、お念仏ひとすじの道に導かれて
……神奈川教区　光雲寺　慶野匡文　65

三、瓦礫をして変じて金と成さしむ
……滋賀教区　西福寺　稲岡純史　75

四、心はおなじ花のうてなぞ
……佐賀教区　光明院　中岡健雄　89

＊凡　例＊

典拠を示すにあたっては次の略号を用いた。書名のあとの数字は、巻数および頁数を示す。

○聖典……浄土宗聖典（浄土宗）
○昭法全…昭和新修法然上人全集（平楽寺書店）
○浄全……浄土宗全書（山喜房仏書林）
○御法語…『平成新版元祖大師御法語　前篇・後篇』（知恩院）

なお引用文は、漢文は書き下し文に、旧字・旧仮名づかいは、新字・現代仮名づかいにあらためたほか、適宜ルビを付した。

教

諭

法然上人は念仏のみの自行化他で生涯を終わられましたが、『選択集』で化他の対象について少々触れられた箇所があります。それは独自の選択論を展開して「念仏は修し易し」と述べられた直後の段です。

もし弥陀が「造像起塔」「知慧高才」「多聞多見」「持戒持律」を本願とされたならば、貧賤・愚痴・少聞・破戒の人びとは救済の枠外に置かれてしまう。なによりも彼らは諸行なので往生に多少の差が出ると指摘されています。その上で

弥陀如来は法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を摂せんがために、造像起塔等の諸行をもって、本願としたまわず。ただ称名念仏の一行をもって本願としたまへり。

と強調されています。

つまり、往生の不確実な貧窮困乏、愚鈍下智、少聞少見、破戒無戒の人びとも、弥陀の平等な慈悲が発現した本願に適った称名念仏の一行によってのみ、往生が確定するということを仰有っていることになります。また、彼らが早く称名念仏者になるよう願っておられるご意図が窺えます。

このように読み取ることが許されるなら、法然上人の教化視線がどのような人びとに向け

られていたかがわかります。諸伝記、ご法語などにも通じます。ご自身の見解をのべられたこの箇所から、枠外にいる余行の者への慈愛ある態度が見受けられます。理詰めの『選択集』からも、この部分から上人の温かな人格が偲ばれてきます。

ところで、上掲の引用文で引付けられるのは「平等の慈悲」という言葉です。今に伝わり、現代においても重要な概念となっています。本願とも関わるこの語は浄土宗の教化者として見落とせない言葉です。法蔵比丘の誓願は弥陀の本願となります。その本願によりみ名を称えて正定業を専修された法然上人は三昧発得され、門弟から弥陀の化身と仰がれた法然上人はまさに平等慈悲の体得者でした。

宗祖が浄土宗を開かれてより、近く「八百五十年佳辰」を迎えようとしています。「仏願故」によって開宗された浄土宗の末徒われらは宗祖の心を「念仏でしか救われない」と心得て、自行と化他に勤しみ、その時を待たねばなりません。

合　掌

令和三年一月一日

浄土門主　願譽唯眞

◎第1章◎

宗祖のみ心

凡入報土について

大正大学教授　曽根　宣雄

1　はじめに

私は、ありがたいことに宗内の様々な講習会等からお声掛けをいただき、講義を行わせていただいています。真摯に法然上人の教えに向き合おうとされている諸大徳の姿を拝見すると本当に頭が下がる思いになります。しかし、残念ながらおよそ浄土宗の教えとは、異なる立場や異なる解釈を示される方々が少なからずおられることも事実なのです。

その中で、一番衝撃的だったのは、上座部の僧侶の主張に基づき大乗経典そのものを後の人々によって創られた文学作品と見なしている浄土宗僧侶がおられたことでした。まず、私たちは上座部の経典が、歴史的に実在した釈尊の直説に付加等をなすことなく厳密に伝承されてきたと本当に言いうるのかということを考えねばなりません。

前々回、佛教大学教授の本庄良文先生の論考を参照しながらこの問題について記させてい

ただきましたが、その要点のみ再度記したいと思います。[1] 本庄先生は、まず、南伝仏教においては経蔵（経典）よりも論蔵（経典の解説書）が重視され、それが無条件に仏の直説とされていることを指摘します。そして部派仏教の仏説の定義について次のように整理されています。

①釈尊の教えには了義（言葉通りに受け止めるべき教え）と未了義（裏に隠された衆生救済の意図を読み取るべき教え）があるという論理を用い、論蔵の権威を高めるためにそれを仏説とした。

②「釈尊の教えには、失われた（＝隠没した）ものもあるが、論蔵の理論の中で、現存する経典に説かれていないものは、隠没した経に説かれていたのを阿羅漢が三昧に入って、特殊な智慧で回復せしめたものという理論によって成立している。

③たとえ釈尊によって説かれたものでなくても法性（真理）に適えば仏説であるという理論が用いられていた。[2]

つまり、部派仏教においても釈尊以外の人物が宗教体験として仏の説法を聞いたものや真

理に違わないものを、仏説とみなしているのです。これらの点から、本庄先生はこういった部派仏教の仏説論が大乗仏教興起の理論的基盤を提供したと結論づけられています。

私たちが大乗経典を仏説とみなすのは、後の修行者が三昧の境地や仏智の境界に入り、そこで仏に出合い、その教えを聞きそれを経典としてまとめたものであるからです。したがって、「浄土三部経」に説かれる阿弥陀仏及び極楽浄土の教えは、架空のものなどではなく、仏智の境界から示されたものであり仏説と言いうるのです。

また、前回は佐伯真光氏の論攷についても紹介させていただきました。佐伯氏の指摘は、次のような内容です。

・明治以後今日まで、日本の仏教界には、仏教が本来合理的、理性的、科学的な宗教であり、かつてインドには純粋で明瞭な根本仏教・原始仏教なるものが実在したという神話がある。

・こういった神話を信ずる立場からみれば、仏教史は仏教堕落の歴史に他ならないことになる。

・この図式を信ずるかぎり、日本の仏教各宗派はいかに弁明しようとも、結局は本来の仏

教から見れば異質的なものであり、堕落した一形態にすぎぬことになる。[3]

・明治になって西洋の学問に接するまで、日本の仏教徒は根本仏教という言葉も原始仏教という言葉も知らなかった。

・仏教が合理的宗教か非合理的宗教かという問題の立て方がなされたこともなかった。

・最澄、空海、法然、栄西、親鸞、道元、日蓮はパーリ語を知らなかった。しかし、彼らはパーリ語文献に通じた現代の学者よりもはるかに立派な仏教徒であった。[4]

この佐伯氏の一連の指摘は、非常に重要なものであり、私たちは謙虚に耳を傾けるべきです。そうでなければ、上座部の恣意的な解釈からの転換を計ろうとした大乗仏教の成立と発展、日本仏教における祖師の新宗派開宗等の活動等は、すべて仏教を堕落させたことに他なりません。

私たち浄土宗僧侶は、法然上人の教えの有する宗教的な価値にこそ着目すべきであり、法然上人が提示された経典解釈こそが真の仏教であり、究極的に完成された教えであることを忘れてはならないのです。私たちが、常に問いかけ、考え続けて行くべきことは、法然上人が浄土宗を開宗された理由なのです。

そういった点において、法然上人の教義の根底にある人間観、所求（極楽浄土）・所帰（阿弥陀仏）・去行（称名念仏）は、けっして蔑ろにしてはならないものです。娑婆において自力得道できない故に浄土の一門に帰するのであり、娑婆を浄土にすることができないので極楽浄土への往生を願い、自らの身中に阿弥陀仏を生起することができないので、救済者である阿弥陀仏に救いを求め、阿弥陀仏が選択本願において救済を約束された称名念仏を修するのです。[5] 法然浄土教においては、所求である極楽浄土はあくまでも指方立相であり、所帰としての阿弥陀仏は自己に内在するのではなく、浄土を構えられている救済者なのです。私たちの心が浄土や阿弥陀仏とイコールになるという表現は、さとりを意味することに他ならない点に注意が必要です。

天台宗・真言宗を主流とした顕密仏教の時代に、法然上人が比叡山を下り浄土一宗を開宗したということは、自らの身の危険を顧みない勇気ある行動であったことは間違いありません。そこまでして、浄土宗を開宗されたのは、従来の宗派の枠内では説けないことがあったのであり、仏教の教えの転換を計る必要があったのです。私たちは、この現代においても「浄土宗にしか説けない教えとは何であるのか?」ということをきちんと確認して行かねばなりません。

2　『浄土立宗の御詞』

法然上人の『浄土立宗の御詞』には、次のようにあります。

我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり。もし、天台によれば、凡夫浄土に生まるることを許すに似たれども、浄土を判ずること浅し。もし、法相によれば、浄土を判ずること深しといえども、凡夫の往生を許さず。諸宗の所談、異なりといえども、凡て凡夫報土に生まるることを許さざる故に、善導の釈義によりて、浄土宗を立つる時、すなわち、凡夫報土に生まるること現わるるなり。(6)

《訳》

私が浄土宗を立てたのは、凡夫が報土に生まれることを示すためです。もし天台宗であれば、凡夫が浄土に生まれることを認めているようですが、その浄土を低く判じています。もし法相宗であれば、浄土を高く判じていますが、凡夫の往生は許しません。諸宗の説く教えは異なっていますが、すべて凡夫の報土往生を許していません。それ故に、善導大師の釈義によ

って、浄土宗を立てたならば、凡夫が報土に往生できることが明らかとなるのです。

この説明を整理するならば、次のようになります。

	【浄土の判定】	【凡夫往生】
天台宗	×（劣応土）	○
法相宗	○（報土）	×
浄土宗	○（報土）	○

このように「凡入報土」論は、聖道門各宗の教えの中には、見いだせないものであり、それ故に法然上人は浄土宗を開宗されたのです。これは、正しく「浄土宗でなければ説けない教え」であり、私たちはここに法然上人の開かれた浄土宗の素晴らしさを見出さねばなりません。

では、この法然上人が浄土宗を開宗された意図を私たちがどのようにお伝えして行くべきなのかを考えてみましょう。

3　浄土宗の教えの立ち位置

まず、浄土宗の教えが基本的にどのような立ち位置にあるのか確認してみましょう。「教判（教相判釈）」とは、釈尊が説かれた多数の経典を形式・方法・順序・意味内容・教義内容等によって分類し、体系化し価値づけることを言います。浄土宗の教判は、「聖浄二門判」です。『浄土宗略抄』には、聖道門と浄土門について、

始めに聖道門といは、この娑婆世界にありながら惑を断ち悟を開く道なり。―中略―次に浄土門といは、この娑婆世界を厭い捨てて急ぎて極楽に生まるるなり。(7)

と述べられています。『要疑問答』では、

穢土の中にしてやがて仏果を求むるはみな聖道門なり。―中略―往生浄土門というはまず浄土へ生まれて彼にて悟をも開き、仏にも成らんと思うなり。(8)

と説かれています。こういった法然上人の説示を整理するならば、

聖道門―娑婆世界（穢土）において断迷開悟する教え（自力得道）

浄土門―娑婆世界を厭い浄土に往生し、浄土にてさとりを目指す教え（往生浄土）

とすることができます。

教判としては、天台宗では「五時八教判」、真言宗では「十住心判」を用います。これらの教判は、天台宗であれば法華円教、真言宗であれば真言密教をもって、一代仏教の中で最も深く勝れた教えであると位置づける点に特徴があります。それに対して浄土宗の「聖浄二門判」は、教えの浅深や勝劣を問うことはしません。ポイントは、末法の凡夫の機根に相応しい教えであるのか否かにあるのです。『要義問答』において法然上人は、

教を簡ぶにはあらず、機を料らうなり。(9)

と述べられていますが、このことは浄土宗が「教えを選ぶ」教判ではなく、「機をはかる」教判であることを示しています。[10]

法然上人の『念仏往生要義抄』における次の説示は、聖浄二門判の意図を明確に示しています。

ただしいずれの経論も釈尊の説き置きたまえる経教なり。しかれば『法華』『涅槃』等の大乗経を修行して仏に成るに何の難き事かあらん。それにとりていま少し『法華経』は三世の諸仏もこの『経』によりて仏に成り、十方の如来もこの『経』によりて正覚を成りたまう。しかるに『法華経』なんどを読みたてまつらんに何の不足かあらん。かように申す日はまことにさるべき事なれども、我らが器量はこの教に及ばざるなり。その故は『法華』には菩薩声聞を機とする故に我ら凡夫は叶うべからずと思うべきなり。しかるに阿弥陀仏の本願は末代の我らがために発したまえる願なれば利益今の時に決定往生すべきなり。―中略―もとより阿弥陀仏は罪悪深重の衆生の三世の諸仏も十方の如来も捨てさせたまいたる我らを迎えんと誓いたまいける願に遇いたてまつれり。[11]

いずれの経も釈尊が説かれたものであり、『法華経』『涅槃経』等の教えに基づいて修行をして成仏することがどうして難しいことであろうか、三世の諸仏も十方の如来も『法華経』の教えによって正覚を得たではないか、『法華経』を読誦することに何の不足があろうか等と言われることは、本当にそうではありますが、私たち末法の凡夫の器量はこの教えに及ばないのです。なぜならば、『法華経』の教えは、菩薩や声聞を対象としたものであり、私たちに適う教えではないのです。それに対して阿弥陀仏の本願は末法の凡夫である私たちのために立てられたものですから、私たちは必ず往生することができるのです。阿弥陀仏の本願とは、三世の諸仏にも十方の如来にも見捨てられた罪深い私たち凡夫を我が浄土に迎えようと誓われたのであり、その本願に出会えたとしています。

この説示の中より、私たちは二つの点を学ぶことができます。一つ目は、法然上人は他宗の教えを批判されてないということです。二つ目は、「機教相応（能力に見合った教え）」ということです。『四十八巻伝』には「大原問答」時の詞が次のように伝えられています。

上人法相・三論・華厳・法華・真言・仏心等の諸宗に亘りて、凡夫の初心より仏果の極位に至るまで、修行の方軌、得度の相貌具に述べ給いて、「これらの法、皆義理深く利

益優れたり。機法相応せば、得脱踵を廻らすべからず。[12]

法然上人は、法相・三論・華厳・法華（天台）・真言・仏心（禅）等の教えについて、「これらの教えはいずれも深く利益も勝れているとし、私の能力と教えが見合ったならば、速やかにさとりを得ることが出来るでしょう」と述べています。ここに仏説に対する法然上人の基本姿勢を見ることができます。その上で、法然上人は次のように述べます。

ただし源空ごときの頑愚の類は、更にその器に非ざる故に、さとり難く惑い易し。しかる間、源空発心の後、聖道門の諸宗につきて、広く出離の道を訪うに、かれも難く、これも難し。これすなわち、世下り人愚かにして、機教相背く故なり。[13]

私源空のような愚かな者達は、その器ではないのでさとりを得ることは難しく惑いやすいのです。私は、発心して以後、聖道門の諸宗の教えについて生死解脱の道を尋ねましたが、どの教えも難しいものばかりでした。これは、末法の世になり、人々が愚かになり教えと能力が合致しないからなのだとしています。すなわち、従来の聖道門は、素晴らしい教えでは

ありますが、末法の凡夫に相応しない故に、末法の凡夫に相応する教えが求められるのです。

『念仏往生要義抄』には、

聖道諸宗の成仏は上根上智を本とする故に声聞菩薩を機とす。(14)

とあり、『念仏大意』には、

かの聖道門はよく清浄にしてその器に足れらん人の勤むべき行なり(15)

とあります。聖道門は、声聞や菩薩を対象としたものであり、清浄にしてその器である者のみに可能な教えなのです。そこで法然上人は「機教不相応の教え」から「機教相応の教え」への転換が必要不可欠であると考えられたのです。

『浄土宗略抄』には、

ただ聖道門は聞き遠くして解り難く、惑い易くして我が分に思いもよらぬ道なりと思

い放つべきなり。―中略―さればこのごろ生死を離れんと欲わん人は証し難き聖道を捨てて、往き易き浄土を欣うべきなり。[16]

とあります。聖道門の教えは理解の及ぶところではなくさとり難く、惑いやすい私たちには相応しない教えであると知り、思いを断つべきであるとし、生死解脱を求める者は、往生しやすい浄土を願うべきであるとしています。

では、何故に浄土門は末法の凡夫に相応しい教えなのでしょうか。これを理解するためには、阿弥陀仏の選択本願の背景を踏まえる必要があります。『念仏大意』には、

かくのごときの末代の衆生を阿弥陀仏予ねて解りたまいて、五劫の間思惟して四十八願を発したまえり。その中の第十八の願にいわく「十方の衆生、心を至して、信楽して、我が国に生まれんと欲いて、乃至十念せんに、もし生まれずといわば正覚を取らじ」と誓いたまいてすでに正覚を成りたまえり。[17]

とあります。法然上人は阿弥陀仏の四十八願について、末法の凡夫を十二分に理解された上

で発願されたものであることを明らかにされています。したがって、阿弥陀仏の四十八願は、私たち末法の凡夫を対象として立てられたものであり、浄土門の教えは正しく末法の凡夫のための教えということができるのです。『三心義』において「聖道門はこれ汝が有縁の行、浄土門というは我らが有縁の行」[18]と述べ、聖道門は、（機根の勝れた者の）有縁の行であり、浄土門というのは（末法の凡夫である）私たちにとって有縁の行であるとされているのは、浄土門のお念仏の教えが末法の凡夫を対象にしている教えであるからに他なりません。それ故に『浄土宗略抄』には、

前の聖道門は我が分にあらずと思い捨てて、この浄土門に入りて一筋に仏の誓を仰ぎて名号を称うるを、浄土門の行者とは申すなり。これを聖道浄土の二門と申すなり。[19]

と説かれ、聖道門は末法の凡夫である私に相応しくないと受け止めてそれを捨て去り、相応しい教えである浄土門に帰して一筋に念仏をとなえる者を浄土門の行者とされているのです。生死解脱を願うならば、さとりを得ることが難しい聖道門を捨て、往生しやすい浄土門を願うべきであるというのが法然上人の提示されたことなのです。以上のことから、浄土門の教

えこそが末法の凡夫にとって有縁の教えであり、相応しい教えであることが確認出来ると思います。何よりも、阿弥陀仏の本願が末法の凡夫を対象に建立されていることを法然上人が明らかにされたことを忘れてはならないのです。

4　凡夫の自覚について

法然上人は『諸人伝説のことば』においては、次のように述べられています。

もし智慧をもて生死を離るべくば源空なんぞ聖道門を捨ててこの浄土門に趣くべき。まさに知るべし、聖道門の修行は智慧を極めて生死を離れ、浄土門の修行は愚痴に還りて極楽に生まる[20]

もしも、智慧によって迷いの境地を離れることができるのなら、私源空がどうして聖道門を捨てて、この浄土門に帰依する必要があるでしょうか。聖道門の修行は、智慧を極めて生死解脱をはかるものであるのに対し、浄土門の修行は、愚かな自分に立ち返って極楽に生ま

れるとしています。この「愚痴に還る」というのは、驕り高ぶりを捨てありのままの自己を見つめることでありますから、凡夫の自覚をすることに他なりません。

では、浄土宗では何故に凡夫の自覚が求められるのでしょうか。『浄土宗略抄』には、

二つに深心といは、すなわち善導釈してのたまわく「深心といは、深く信ずる心なり。これに二つあり。一つには決定して我が身はこれ煩悩を具足せる罪悪生死の凡夫なり、善根薄少にして、曠劫よりこのかた常に三界に流転して出離の縁なし、と深く信ずべし。二つには深くかの阿弥陀仏、四十八願をもて衆生を摂受したまう、すなわち名号を称うること下十声に至るまで、かの仏の願力に乗じて定めて往生を得と信じて、乃至一念も疑う心なきが故に深心と名づく。―中略―この釈の意は、始めに我が身の程を信じて後には仏の誓を信ずるなり。後の信心のために始めの信をば挙ぐるなり。(21)

とあります。深心とは深く信じる心のことを言い、これには「信機・信法」の二つがあります。「信機」とは、阿弥陀仏の御前において、自らが煩悩を具足した罪悪生死の凡夫であり、はるか昔より出離の縁のない存在であることを信じることです。「信法」とは阿弥陀仏の本

願によって、念仏をとなえたならば間違いなく往生できると信じることです。すなわち、深心（二種深信）は、

信機―始めに我が身の程を信じる。
信法―後に仏の誓いを信じる。

という関係にあります。ありがたいことに出離の縁のない凡夫が阿弥陀仏の本願によってのみ救われて行くのです。もし信機が存在せずに信法のみであるならば、阿弥陀仏の救いの対象が「出離の縁の無い罪悪生死の凡夫」であることを信じることになりません。そしてそれは救いの本願に対する疑いとなってしまうのです。それ故に信機（凡夫の自覚）は、念仏衆生が発す心として、非常に重要なのです。

大乗仏教においては「一切衆生悉有仏性」ということが説かれます。そのため、大乗の聖道門では宗派によって修行法等は異なるものの、煩悩を断じて仏性を顕現させること（さとり）を目指します。[22] 一方浄土門では、法然上人が「真如実相顕現するに由なし」[23]と述べられているように、煩悩を断じて仏性を顕現させることができない故にお念仏をおとなえして阿

弥陀仏に救っていただくことを願うのです。しかしながら、常に自分を律しているとか、きちんと廃悪修善を実践できている等々の認識を有している人は、阿弥陀仏の救いがなくとも自力で得道できるという思いに陥ってしまいがちです。そういった点において凡夫の自覚は、阿弥陀仏の救いを求める上で、信仰構造上必要不可欠なことなのです。

5　凡夫の自覚（信機）は阿弥陀仏からの要請

凡夫の自覚に関しては、もう一点重要なことがあります。周知の通り、念仏行（起行）は『選択集』第三章に示されるように阿弥陀仏によって選択されたものであり、第十八願に明示されています。念仏行は、阿弥陀仏が定められたものであり、浄土往生を願う私たち凡夫に対する要請であることが確認できます。一方、三心（安心）は、『観無量寿経』に「もし衆生あって、かの国に生ぜんと願ぜば、三種の心を発すべし。すなわち往生す。何等をか三とす。一つには至誠心、二つには深心、三つには回向発願心なり。三心を具する者は、必ずかの国に生ず」[24]と説かれています。ただし、これは釈尊の説示であり、釈尊からのみの要請のように感じられます。また『無量寿経』中の四十八願の中にも信（三心）のための願は誓

われていないように見受けられます。このことについて法然上人はどのように考えられていたのでしょうか。『七箇条の起請文』には、

三心少けば往生しそうろうなんやと申す事極めたる不審にてそうらえども、これは阿弥陀仏の法蔵菩薩の昔、五劫の間夜昼心を砕きて案じ立てて成就せさせたまいたる本願の三心なれば、徒徒しくいうべき事にあらず。いかに無智ならん者もこれを具し、三心の名を知らぬ者にても必ず空に具せんずる様を設らせたまいたる三心なれば、阿弥陀を憑みたてまつりて少しも疑う心なくしてこの名号を称うれば、阿弥陀仏必ず我を迎えて極楽に往かせたまうと聞きて、これを深く信じて少しも疑う心なく迎えさせたまえと思いて念仏すれば、この心がすなわち三心具足の心にてあれば、ただひらに信じてだにも念仏すればすずろに三心はあるなり。(25)

と示されています。法然上人は、三心とは阿弥陀仏が五劫思惟の上、一切衆生を救済するために本願において定めたものであって、凡夫である私たちがそれに対して具足できるとかできないといった思慮分別を加えるべきはないと説かれます。そして、阿弥陀仏が、無智なる

者も、三心の名を知らない者も具足できるようにとお考えになった上で設けてくださったのが三心であるとしています。ここでは、「本願の三心（本願で定められた三心）」という解釈を見ることができます。

また大いに注目されるのが『要義問答』の説示です。そこでは、十八願と三心について、次のように説かれています。

阿弥陀仏の本願の文に「もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に、信楽して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覚を取らじ」という。この文に至心というは『観経』に明かすところの三心の中の至誠心に当たれり。信楽というは深心に当たれり。欲生我国は廻向発願心に当たれり。[26]

ここで法然上人は第十八願文について、

至心＝至誠心

信楽＝深心

欲生我国＝廻向発願心

であることを明らかにされています。すなわち『要義問答』においては「三心」は阿弥陀仏が本願で定められたものとされているのです。[27]

『七箇条の起請文』と『要義問答』の説示からは、念仏行（起行）のみならず、三心（安心）もまた阿弥陀仏によって選択され定められたものであるという法然上人の解釈を確認することができます。したがって、三心自体が阿弥陀仏によって定められたものである以上、「信機」に示される「出離の縁の無い罪悪生死の凡夫」という自覚は、阿弥陀仏が私たちに要請しているものということができるのです。[28]

6　現代社会と凡夫の自覚

ここで問題となるのは、凡夫の自覚を有さない人に対して、私たちはどのように対処していくべきなのかということです。まず私たちが、確認すべきことは、宗教の有する価値観というものが、必ずしも世俗の価値観と一致するものではないということです。世俗の価値観

と異なるからこそ宗教が必要なのであり、それを提示し気づいていただくことが重要なのです。「人間＝凡夫」ということは、法然上人の教えの根底にあることですが、世俗の価値観と異なるとして説くことを躊躇することがあってはならないのです。半世紀程前になりますが、佛教大学の教授をされていた清水澄氏は論文において、

現代の精神に潜む非凡夫性を洞察し、その克服が真剣に考えられているだろうか。[29]

と述べられました。この指摘は、今現在の私たちにも当てはまるものであり、問題の本質を鋭く突いていると思います。現在の日本においても同様に「人間＝非凡夫」というおごりともいうべき認識が蔓延してしまっているのです。仏教では「彼岸と此岸」「仏と凡夫」「さとりと迷い」という対比を提示します。それは、私たち自身が至らない存在であることや不完全な存在であることを自覚することなく、清浄なるものを求めるという方向に向かうことがないからです。単なる現状肯定論では、かつて日本仏教を堕落させた本覚思想に他ならないのです。[30] 前述したように自分自身が凡夫であるという自覚が無いにも関わらず、阿弥陀仏に救いを求める心は生じないのです。では何故に現代社会は、凡夫の自覚から遠ざかっている

のでしょうか。

京都大学名誉教授で文化庁長官も勤められた河合隼雄氏は、『岩波講座転換期における人間9　宗教とは』の中で次のように述べています。

近代の特徴は、何かにつけ、「進歩」、「発展」が魅力ある言葉としてもてはやされ、人間は何らかの意味において、進歩し発展することを目指そうとしてきた。このことは確かに意味深いことである。しかし、そのような直線的な発達段階のモデルにのみ縛られているために、われわれは実に多くの人生の多様な姿を見逃してきたのではないだろうか。―中略―よく考えてみると、アイデンティティが「確立した」などと完了形で言えるはずがなく、一生続くプロセスであるし、それは決して段階的に進歩するのみのものでないことがわかるであろう。[31]

このように河合氏は、現代社会が「進歩」「発展」のみに執われ、それ以外の価値観に目を向けていないことを指摘しています。多くの人々が、人間は常に「進歩」「発展」する存在であると思い込んでいるのです。進歩発展は意味深いことでありますが、一方で私たちは、

実際に常に「進歩」「発展」して行くという生き方ができているのだろうかということを顧みる必要があります。現実には、「進歩」「発展」という生き方ができていない者が圧倒的多数ではないでしょうか。河合氏は、仏道修行に関して語っている訳ではありませんが、現代に生きる私たち人間の現実の姿を鋭く分析しているといえるでしょう。こういったことをきっかけにして凡夫の自覚に導くことは非常に大切なことです。

そもそも、法然上人は開宗以前の自らについて、

> 悲しきかな悲しきかな、いかがせんいかがせん。ここに、我等ごときは、すでに戒定恵の三学の器に非ず。この三学の外に、我が心に相応する法門有りや。我が身に堪えたる修行や有ると、万の智者に求め、諸の学者に訪いしに、教うるに人もなく、示す輩もなし。(32)

と述べておられます。私たちは、戒・定・慧の三学の器ではないのです。つまり常に正しい行動ができない存在・心を制御できない存在・無執着になれない存在というのが私たちなのです。法然上人は、三学という菩薩道を実践しつつも、「進歩」「発展」を遂げられなかった

ことを告白しているのです。私たちは、法然上人の言葉から、教え（法）が素晴らしくとも、実践する者の性質や能力（機）に相応していなければ現実の場においては意義を持ち得ないことを学ぶことができる一方、「三学非器」の自覚は、従来の「さとりの仏教」に対する挫折を示していることも確認することができます。さとりの仏教から拒絶され否定されたのが私たち凡夫であり、そのために浄土宗の教えが示されているのです。

曹洞宗のお寺に生まれ、東京大学名誉教授・埼玉工業大学名誉学長を務められた武藤義一氏は次のように述べておられます。

仏教も歴史的展開によって今日に至ったもので、仏滅後に根本仏教から始まりついに大乗仏教に至り、大乗仏教も多くの歴史を経ているのである。それで、「般若経」の空、「法華経」の一念三千、「華厳経」事々無礙、「涅槃経」の悉有仏性に至り、ついに一木一草に至るまで救済可能であるという原理が示されたが、まことにみごとな教えでも、ひるがえって各自が自分の心の奥底をよくのぞいて見たときに、いい知れぬ空しさを感ずるはずである。理論が過剰になると何事も理屈を理詰めにしてついに息が苦しくなってしまう。―中略―しかし日本仏教も聖道門と浄土門にわかれており、今日ではあまり

宗論を闘わせないようであるが、聖道門は天台本覚思想が主流で、私たちは本来は救われているのである、という立場に立っている。ほんとうにそうか、よく反省せよと警告したのは法然上人だけではなかろうか。[33]

これは、日本仏教祖師たちの中で、法然上人がいかに現実を直視し、かつ本音で活動されたのかを示す文だと言えましょう。「今現在の私たちは、本当に救われているのだろうか」「本当にさとりを得られる存在なのだろうか」ということを改めて考える必要があるのです。

7　自分の存在を否定してしまっている人のために

河合氏は、「進歩」「発展」という直線的な発達段階のモデルに沿うことができない人達を見逃してきていることを指摘されました。武藤氏は、本当に救われているとか悟っていると言えるのか、法然上人は反省せよと警告していると指摘されました。私自身は自らの現実を直視した際にこのお二人の主張に賛同せずにはいられません。同時に河合氏の眼差しは、法然上人の眼差しとベクトルを一にし、武藤氏は私たち凡夫の問題の核心を突いていると思い

ます。

遠藤周作先生の『おバカさん』という作品の中には、次のような文章があります。

人間はみんなが、美しくて強い存在だとは限らないよ。生まれつき臆病な人もいる。弱い性格の者もいる。メソメソした心の持ち主もいる。けれどもね、そんな弱い、臆病な男が自分の弱さを背負いながら、一生懸命美しく生きようとするのは立派だよ。[34]

「私たちは、本当に強い存在なのだろうか？」「強い存在と言い切れる人がどれだけいるだろうか？」と問うたときに、自分を「強い存在」だと言い切れる人は、いないのではないでしょうか。

娑婆世界は、思うようにならないことだらけです。その中で圧倒的多数の人々は、挫折や苦しみを味わいながらも踏ん張りながら生きています。親しい人との別離によって悲しみの真っ只中にいる人、いつまでも悲しみを引きずってしまう人、理想とする自分になれない人、前向きになれない人等々です。多くの人々は、精神的な苦行状態にあると言っても過言ではありません。これは実体のない「悲しみ」や「苦しみ」に執われて悩んでいるということに

なりますが、それこそが私たちが凡夫である証拠なのです。阿弥陀仏は、こういった私たち凡夫が南無阿弥陀仏さえ称えれば、否定することなく受け入れてくださるのです。

8　仏凡の呼応関係

『往生浄土用心』において法然上人は、

衆生仏を礼すれば仏これを見たまう、衆生仏を称うれば、仏これを聞きたまう、衆生仏を念ずれば仏も衆生を念じたまう。かるが故に阿弥陀仏の三業と行者の三業とかれこれ一つになりて、仏も衆生も親子のごとくなる故に親縁と名づく。(35)

と述べられ、私たち凡夫と阿弥陀仏の間には、念仏によって呼応関係が成立することが説かれています。藤堂恭俊台下は、この法語について、

「かれこれ、ひとつになる」という「ひとつ」は、仏と凡との入我我入といった状

態・境地を指すのでなく、むしろ今まで無関係にあった仏と凡が称名念仏を中心とする宗教行為をとおして、「親子のごとき」関係を結び、親しく、むつまじい心情を持って、触れあい、対応し呼応しあうことになるから、いきおい心情的に仏と凡とが「ひとつ」に融けあうことを意味している。[36]

と述べられています。確認すべきことは、「仏凡一如・仏凡不二」というのは、入我我入のようなさとりの境界を示す語であり、法然上人はそういった内容は決しては説かれていないということです。説かれているのは念仏に基づく仏凡の呼応関係なのです。

また、法然上人は『ある人に示すことば』の中で、

弥陀の本願を決定成就して極楽世界を荘厳し立てて、御目を見回わして我が名を称うる人やあると御覧じ、御耳を傾けて我が名を称する者やあると、夜昼聞し召さるるなり。されば一称も一念も阿弥陀に知られまいらせずという事なし。されば摂取の光明は我が身を捨てたまう事なく、臨終の来迎は虚しき事なきなり。[37]

と述べられています。この法語は阿弥陀仏を「本願成就・光明摂取・来迎引接」の三様態で捉えていることを示しているものであると同時に、本願を成就された阿弥陀仏が、我が名をとなえよと呼びかけ、それに応じて念仏を称えて阿弥陀仏に救いを求める者を必ずや光明により摂取し、臨終時には来迎してくださることを示したものです。

9　お念仏は阿弥陀仏によるカウンセリング

生涯をかけて浄土宗カウンセリングの構築に尽力された中原実道師は次のように述べておられます。

阿弥陀さまのお念仏、阿弥陀さま、わしにとって阿弥陀さまはスーパーカウンセラーなんで、私の悩みはお念仏の声に乗せて、阿弥陀さんに全部聞いてもらう、そういうことをわしはするんじゃけども、あんたも阿弥陀さまという仏様のいらっしゃることを信じて、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏の声に乗せて、中原に言うてもまだ届かない深い深い心の闇があるならば、それを阿弥陀さんに聞いてもらおうや。[38]

お念仏が、阿弥陀仏によるカウンセリングであるというのは、中原師ならではの理解であり、卓見だと思います。ですが、よくよく考えて見れば、私自身のお念仏というのは「阿弥陀様またやらかしてしまいました。また失敗してしまいました。こんな私ですがお救いください」というものであり、お念仏の声に自らの妄念を乗せて聞いていただいているのです。阿弥陀仏に心の中をさらけ出せるのは、お念仏ならではと思います。

10　終わりに

法然上人は、あくまでも私たちを凡夫とし、娑婆を穢土であるとされました。その上で凡夫である私たちを否定することなく、念仏一行によってお救いくださるという阿弥陀仏の選択本願を提示されました。「凡入報土」論は、罪悪生死の凡夫が位の高い浄土に往生できることを示すものであり、阿弥陀仏の救いが凡夫こそを正客とすることを明示するものです。いうなれば「進歩・発展出来ない者」「悩み苦しむ者」等を見捨てることなく、救いの対象としているということなのだと思います。自らの存在を否定された者、自らの存在を否定的

にしか捉えられない者。それは、娑婆の価値観に過ぎず、阿弥陀仏はそういった私たちを一人も漏らさずに救ってくださるのです。

しかし、忘れてはならないことは、法然上人がそういった阿弥陀仏の救いに対して、念仏による現世でのさとりや、すでに救われているという説示を終にされなかったということです。それは、娑婆に生きる以上、私たち凡夫は煩悩を断じ尽くすことができない存在であるからなのです。こういった現実の直視こそが法然上人の教えの重要な点だといえましょう。法然上人は、凡夫が不二や一如と無縁であることを指摘された上で、娑婆で悩み苦しむその凡夫否定することなく、常にあたたかく見護(まも)り、浄土に往生させてくださる阿弥陀仏を説かれているのです。それ故に「凡入報土」論は、私達を精神的に解放する教えであるといえるのです。

【註】

（1）本庄良文稿「阿毘達磨仏説論と大乗仏説論」『印仏研究』三八―一、及び「経の文言と宗義―部派佛教から『選択集』へ」『日佛年報』第七六号

（2）前掲本庄良文稿『日佛年報』第七六号・一一三頁

（3）佐伯真光著「明治仏教百年の錯誤―根本仏教神話を非神話化しよう―」（『アメリカ式人の死に方』三一九～三三八頁）

（4）『同右』三二九頁

（5）『逆修説法』六七日に「娑婆の外に極楽あり、我が身の外に阿弥陀仏ましますと説きて、此の界を厭い、彼の国に生じて無生忍を得んとの旨を明かすなり」（『昭法全』二七一～二七二頁）とありますように、法然上人は「娑婆即浄土・己身の弥陀」を明確に否定されています。

（6）『聖典』六・六四～六五頁

（7）『聖典』四・三五二頁

（8）『聖典』四・三七八頁

（9）『聖典』四・三八二頁

（10）藤堂恭俊著『法然上人研究』一・七九～八八頁参照

（11）『聖典』四・三二二～三二三頁

（12）『聖典』六・一五五頁

（13）『聖典』六・一五五頁

(14)『聖典』四・三二二頁
(15)『聖典』四・三五〇頁
(16)『聖典』四・三五二～三五三頁
(17)『聖典』四・三四二頁
(18)『聖典』四・三三二頁
(19)『聖典』四・三五四頁
(20)『聖典』四・四八一頁
(21)『聖典』四・三五五～三五六頁
(22)例えば真言宗では、衆生の三密（身口意）と仏の三密が同体化する即身成仏を説きますが、これもまた広義な意味では、仏性顕現（さとり）ということができます。
(23)『昭法全』一四二頁
(24)『聖典』一・三〇五～六頁
(25)『聖典』四・三三七～三三八頁
(26)『聖典』四・三八九頁
(27)法然上人が三心は阿弥陀仏によって選定されたと解されていることを指摘したの

は、丸山博正氏です。（丸山博正著『法然上人の信仰と深まり』一四四頁参照）

(28) 拙稿「凡夫の自覚攷」・『佛教論叢』第六四号所収参照

(29) 清水澄稿「ブルトマンの非神話化について」（『浄土宗学研究』一）

(30) 本覚思想とは、修行せずともそのままで仏であるとする極端な現状肯定論です。

(31) 「いま「宗教」とは」・『岩波講座転換期における人間9　宗教とは』二〇頁

(32) 『聖典』六・六二頁

(33) 武藤義一『岩波講座　宗教と科学1　宗教と科学の対話』二五七頁

正しくは、天台本覚思想は、「私たちは本来さとっている」というべきでしょう。

(34) 遠藤周作著『おバカさん』

(35) 『聖典』四・五五〇頁

(36) 浄土宗総合研究所編『浄土教文化論―阿弥陀仏編―』二〇頁

(37) 『聖典』四・五一二頁

(38) 『中原実道師最終講義録』※未出版

◎第2章◎

宗祖のご法語をいただいて

一、我が身わろしとても疑うべからず

岩手教区　吉祥寺　武田　眞和

如来大慈悲哀愍護念　同称十念

無上甚深微妙法　百千万劫難遭遇

我今見聞得受持　願解如来真実義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰(のたまわ)く、

「我、浄土宗を立(た)つる心は、凡夫(ぼんぶ)の報土(ほうど)に生まるることを、示さむためなり」と。（十念）

（『法然上人行状絵図』六＝『聖典』六・六五頁）

新型コロナウイルスという私たちが過去に経験したことのない感染症が世界中を震撼させています。人の動きを制限するとウイルスの蔓延を防ぐことができますが、社会活動が停滞

し経済への影響は計り知れないものとなることが、各国の対応策で立証されています。

秋を迎えた国内では都市閉鎖という事態までには至っていませんが、日々の感染者数は急増傾向とも、減少傾向にあるとも、判断が難しい状況が続いていました。このような中、経済支援対策としてＧＯＴＯキャンペーンがスタートし、観光地を中心に賑わいが戻ってきました。それにしてもお彼岸の四連休では多くの人々が移動したにもかかわらず、感染者の急激な増加は見られず、感染の実態が不明のままでしたが、秋の深まりと共に、飲食からの感染者が続出し、第三波という現象が現実のものとなっています。

欧米では一日に何万人という感染者数となって都市閉鎖という事態を引き起こしている国もあります。しかし、清潔な日常生活の習慣を持つ日本人は、その特有な国民性から、うがいや手洗い、マスクの着用など、真面目に取り組む生活様式を伝統的に受け継がれてきたものと、改めて感心する次第です。それでも、完璧な感染対策を続けることは難しく、少しの油断から感染が広がることもたびたび起こっています。どうしてそのようなことが起こってしまうかといえば、私たちが「凡夫」だからではないでしょうか。

最初にお読みいたしました、

我　浄土宗を立つる心は　凡夫の報土に　生まるることを　示さむためなり

このお言葉は、総本山知恩院所蔵の国宝『法然上人行状絵図』第六巻第六段に記されております。この絵図は、四十八巻で構成されていることから「四十八巻伝」、また、後伏見上皇が舜昌法印に勅して作らせたことから「勅修御伝」とも呼ばれています。法然上人のご往生からおよそ百年後、十年あまりの歳月をかけて作成されたもので、そのご生涯を絵と詞で記した絵巻物です。そのなかには、多くのお言葉がご法語として収められております。

それまでのさとりの仏教から救いの仏教へと受け止め方を大転換された法然上人。この言葉には、「私が浄土宗を立てるのは、自らの力で仏となる事ができない凡夫でも阿弥陀仏が建立された極楽浄土に往生することができるというお釈迦さまのみ教えを、私一代だけではなく、次の代、さらにその次の代へと伝えていって欲しいという目的があります」という想いがこめられています。

ここで法然上人がおっしゃっている「凡夫」には二つの読み方があります。一つは、凡夫という読み方で、辞書には平凡な人、普通の人という意味が書かれています。もう一つは、凡夫という読み方で、これは仏教の理解や実践に乏しい人、煩悩にまみれた人のことを言い

ます。仏教の生活規則である「戒」を一つも持つことができない存在も、この凡夫に含まれます。法然上人はすべての人が「ぼんぶ」であると受け止められました。『一枚起請文』のなかに念仏をする者は、「愚鈍の身になして」とありますが、法然上人ご自身も「三学の器ものに非ず」と嘆かれて、この戒などを守れない存在であることを自覚されたように、私たちも愚かな身であることをしっかり自覚することによって、誠の心をもってお念仏を相続することへとつながっていくのです。

お釈迦さまは『無量寿経』というお経のなかで、次のようにお説きくださっております。昔、仏となることをめざす法蔵という菩薩さまがおりました。法蔵菩薩は修行を始められるまえ、自らの力で仏となることができない衆生（凡夫）をいかにして仏の世界に救うことができるか、その方法について五劫という長い時間をかけて深く思案されました。それは「我が名を呼んだもの（お念仏をしたもの）を、私の国である極楽浄土必ず救いとる」というお誓いでした。これを「念仏往生」の願と呼んでいます。このお念仏の行であればすべての人が実践することができ、仏となることができる。法蔵菩薩は兆載永劫というとてつもない時間ご修行された結果、この誓いをはじめとした四十八の誓いを成就して、阿弥陀仏という仏さまとなられ、西方極楽浄土という仏の世界を構えられたのです。

この「仏となることができる」というのは、私たちが今生きている娑婆世界ではなく、極楽浄土に往生してからの話です。どうやって阿弥陀さまは救いとってくださるのでしょう。自分の力では極楽浄土へ往くことができない凡夫ですから、阿弥陀仏は私たちが人間界における命が終わるとき、私たちのところへ迎えに来てくださるのです。これを阿弥陀仏の来迎と言います。ですから、お念仏をおとなえする人は阿弥陀さまの願いに叶っているので、一〇〇％極楽浄土に往生することがかなうのです。しかも、お念仏はいつでもどこでも誰でもが実践できる易しい行。私たちがどんなに老いたとしても、一生涯にわたって相続、続けていくことができるのです。

法然上人が浄土宗を立てることを決意されたのは四十三歳の時です。その根拠となったのは「我が師、善導一師」とされた唐の善導大師が著された『観無量寿経疏』に書かれる「一心専念の文」と呼ばれるご文です。その最後には、「順彼仏願故（彼の仏の願に順ずるが故に）」という五文字があります。この「願」とは、先ほどの阿弥陀さまのお誓いのことで、これこそが浄土宗の修行を念仏一行とされた最大の確信であり、法然上人はこの一文を絶対的な根拠とされて念仏三昧の生活に入られたのです。

そして、六十六歳の時に著された『選択本願念仏集』の冒頭に書かれた法然上人のご自

筆とされる「選択本願念仏集南無阿弥陀仏往生之業念仏以先」の二十一文字。その最後の五文字である、「念仏を以て先となす」とは、極楽往生のためには先ずお念仏をおとなえすることが大事ですよ。おとなえしているうちに目指すべき大切な心は具わってゆくのですよ、と凡夫である私たちにお示しくださったものなのです。

そんな私たちにとって、凡夫であることを自覚することが、お念仏を信仰するうえで大切なことです。法然上人がお念仏の肝要をまとめられた『一枚起請文』に、お念仏を信じる人の心構えとして書かれた「愚鈍の身になして」というお言葉がございます。それは現在、浄土宗が精神的な支柱として掲げている四つの言葉の内の一つ「愚者の自覚」に通じます。しかし、愚かな自分というものをしっかり自覚するということは、大変難しいことです。他人の欠点はすぐ気がついても、自分の欠点は以外と気づかないものです。間違ったことを言葉や行動に出してはいけないなど、正しいことを実践しようとしている自分は、賢いとは言えなくても愚かではないと、思い込んでいる人が多いのではないでしょうか。この「愚者」というものは、どのようにとらえたら良いのでしょう。

お釈迦さまは、『法句経（ほっくぎょう）』というお経の中で次のように説かれています。

愚かなる者も　おのれ愚かなりと思わば　彼は賢者なり
愚かなるに　おのれ賢しと思うは　彼こそまことの愚者なり
（自分を愚かだと考える愚か者はまだ賢い。
自分を賢いと思う愚か者こそ、誠の愚か者である）

このように、賢者と愚者の受け止め方の違いが端的に現されています。たとえどれだけ学びを深めようとも、それにおごるようでは愚かな人となってしまう。どれだけ勉学を積もうとも、自身の至らなさを思い、努力をし続けられる人こそ本当に賢い人であるとのお釈迦さまの言葉は一見簡単に見えますが、愚かである自分を自覚することの難しさを示していると思います。

さて、当山の檀家さんに土川さんというお爺ちゃんがいらっしゃいました。平成二十四年にご長男が病気で先立たれ、ご実家が浄土宗ということから、ご縁を持たせていただきました。初めての仏さまということ、亡くなられたご長男のお子さんが、まだ小・中学生ということもあり、慌ただしく仏事が進められました。四十九日も終え、お盆前にはお墓も建てられ、開眼（かいげん）と共に納骨されました。お墓を選ぶとき土川さんから、「南無阿弥陀仏のお名号が

書かれたお墓が多いですね。それ以外の文字でもいいのでしょうか」と聞かれ、お好きな文字がありましたらとお答えしました。そして選ばれたのが、極楽浄土に往生したら先だった方との再会を果たせるという意味の「倶会一処（くえいっしょ）」という言葉でした。

土川さんは、この年の秋彼岸に行った別時念仏会に初めてご夫婦で参加してくださり、それから毎月行っている別時念仏会とご詠歌の練習会でご夫婦をお見かけするようになりました。さらには、教区の詠唱大会や舞台での奉納、平成二十八年五月に当山で開筵（かいえん）した五重相伝の際にもご夫婦で参加してくださいました。

土川さんの弟さんも自分の墓を建てておこうということになり、弟さんの奥さまと二人で場所を決め、秋にはお墓が出来上がり開眼供養をしました。お墓に刻む文字は兄である土川さんに依頼したそうです。そこには「微風吹動」と書かれていました。「倶会一処」同様、極楽浄土について説かれたお経『阿弥陀経』からの引用で、お浄土に吹くやわらかな風のことをいいます。お念仏と共に『阿弥陀経』も読まれていたのだろうと、その深い信心に敬服いたしました。弟さんもこの言葉をとても気に入っていらっしゃいました。しかし、弟さんの奥さまは末期ガンで翌年の夏にご逝去されました。続くご不幸の中、毎月の別時念仏会とご詠歌の練習会に、土川さんは引き続きご夫婦で参加してくださいました。当山の別時念仏

会では、出席された方にお名前とともに南無阿弥陀仏のお名号を書いていただいているのですが、毎月参加される土川さんのお名号は次々新しいものが書き納められていきました。

昨年の秋のこと、奥さまから土川さんが定期検診の結果、余命半年と宣告されました、と告げられました。それでも土川さんは、落ち込む様子もみせず別時念仏会に毎月いらしてくださり、お名号を書かれていかれ、その姿に大変驚きました。しかし、令和二年一月二十六日の別時念仏会に参加され、お名号を書かれたのを最後にお目にかかる機会はやってきませんでした。二月は欠席で、三月からは新型コロナウイルス感染拡大の影響で別時念仏会をはじめとした行事が休止となりました。そしてその年の八月二十六日、次男である息子さんから土川さんがご逝去されたとの報がありました。享年九十二、静かに息を引き取られたとのことでした。翌日、ご親族が、お寺にご挨拶にいらっしゃいました。私は皆さまに、「これが初めてお書きになったお名号、そして最後にお書きになったお名号がこれです」と言って土川さんがお書きになったお名号とお名前をお見せしました。その時、息子さんが「全然変わってないね」と申された言葉は非常に印象的でした。

本堂でのご葬儀では、ご詠歌の会員十一名と共に、「この世は夢のように無常であるけれど、阿弥陀さまが救ってくださるので思い煩うことはない」という意味の「光明摂取和

讃」をおとなえしてお送りいたしました。

土川さんのご戒名には、念仏者が大切にするべき三つの心である三心の一つで、お念仏の教えを深く信じる心「深心」からとって「深譽」と譽号をお贈りして、さらに弟さんの墓石に書かれた「微風」も入れさせていただきました。とてもお念仏を深く信仰し、教えを熱心に学ばれ、ひたむきに実践され続けた土川さんの姿は、まさにお釈迦さまのおっしゃった「賢者」そのものでした。阿弥陀仏の極楽浄土において仏となるための行に励みながら、私たちをお待ちくださっていることと思います。

四十三歳で「彼の仏の願に順ずるが故に」とお念仏への確信を得て、六十六歳で「お念仏は先ずおとなえすることです」とおとなえすることの大切さをお示しになった法然上人。建暦二年正月二十五日に八十歳でご往生されますが、その二日前に書き遺された『一枚起請文』を「ただ一向に念仏すべし」と結ばれています。上人は、生涯にわたり変わることなく、凡夫往生のための念仏一行の大切さをお示しになられたのです。そのお念仏へのみ心は、救いのみ教えとして長きにわたって多くの人々の心のよりどころとなって、私たちに受け継がれております。

浄土宗は令和六年に開宗八百五十年を迎え、総本山知恩院をはじめ各大本山では記念事業

が進められております。皆さまのお念仏の信心が形となり、後の人々へと伝えられてまいります。どうぞ日々の生活の中で、極楽浄土へ救われて往くただ一つの道であるお念仏の行にご精進いただきたいと思います。

最後に、皆さまと共に十遍のお念仏をおとなえいたしまして、お話を終わらせていただきます。（同称十念）

二、お念仏ひとすじの道に導かれて

神奈川教区　光雲寺　慶野　匡文

如来大慈悲哀愍護念　同称十念

無上甚深微妙法　百千万劫難遭遇

我今見聞得受持　願解如来真実義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く、

「我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり」と。（十念）

（『法然上人行状絵図』六＝『聖典』六・六五頁）

皆さま、ようこそお参りくださいました。こうして声に出して木魚をたたいてお念仏をおとなえするのも久しぶりですね。世の中、新型コロナウイルス感染拡大以来、何事も環境を

整え工夫しながら行わなければならず窮屈な思いをすることが多くなっておりますが、本日は皆さまの要望にお応えして、こうして念仏会を迎え、私も嬉しい限りです。飛沫感染に注意を払いながらも、やはり、声に出して、そう、耳に聞こえるくらいでよろしいですから、おとなえすることがありがたいことです。本日は、法然上人のみ心のままに、救われていく道として、お念仏がどれほどありがたく尊いものなのかをお話ししたいと思います。

ここ数年、日本はおろか世界各地で大災害が続いております。台風、大雨、洪水、河川氾濫、土砂災害、大地震、津波、火災、さらには感染病が次々に起こり、その表現たるや、「最大級の」や「経験したことのない」など、伝える言葉すら失っています。各地で起こっている被害がいきなり自分に及んでくる状況ですから、常におびえている感じではありませんか。

そもそもお釈迦さまは、この世の一切は苦しいのだと説かれています。実際、仏教時間軸の中で説かれるところは、今あるものは必ず崩れるという無常が語られましてね、この先、風害、水害、地変、火災、疫病といった大災害が繰り返されていくというのです。そして私どもは貪りや怒り、無知からなされる行いで苦しみ続け、誤った悪い考えがあふれかえり、ついには寿命が十歳にまでなってしまうというのです。別に皆さまを怖がらせようとして話

しているのではありませんよ。そう経典に説かれているのです。例えば平均寿命一つとっても、大地震、津波、この度の世界規模の新型コロナの流行で、多くの命が失われていますから、平均寿命も縮むはずです。これまででしたら、こんな話は、他人事として耳を貸さなかったかもしれませんが、いやいや、確かにそうかもしれないと思う昨今です。お釈迦さまが、この世は苦しいとおっしゃることに、うなずくしかない思いです。

しかしここからが大事です。お釈迦さまはだからこそ、この娑婆から離れ、苦しみの世界から楽な世界へ行きなさいと、多くの教えを説き示してくださったのです。何もしなければ、ただただ苦しみの世界が続くだけです。六道輪廻（ろくどうりんね）の話しは毎度させていただいてますでしょう。とりわけ私どもはね、悪業を続けた結果、地獄、餓鬼、畜生など三悪道へ落ちる身なのです。ですからそこへ行くことなく安楽な世界へ向かえと、お釈迦さまは多くの方に教えを説いてくださったのです。

法然上人も救いの道を求めて比叡山に上り、ご修行なされたのですが、それは苦しく気の遠くなるような道でした。そもそも智慧第一の法然房ともいわれた、広く仏教に通じ、後の天台座主とも仰がれたお方なのです。その讃えられた法然上人でさえ、なかなかご自身が納得される救いの教えを見出すことができなかったのです。学んだ仏教は、つまるところ三学（さんがく）

におさまると言われました。三学とは何やら難しそうですが簡単に言葉だけで言えば、戒、定、慧の三つのことです。つまり守るべき戒を持ち、その結果、心を静める禅定に入り、そこから智慧の獲得へ進むことでやっと仏道に乗れるというのです。そこからやっと仏になるための修行の段階が進んでいくのです。仏教はさまざまに説かれますが、所詮、三学をはずれることはないのです、それが全てなのです。それなのに法然上人は三学の出発点、その戒一つすらたもつことができないと苦しまれるのです。当然、定の段階まで進めません。だから当然仏道に乗れないのです。どうにもならない自分をどこまでも見つめられます。見つめるほどに悲しみがこみ上げてきます。どうしたらよいのか進む道が閉ざされ、苦しみは極限に達します。「かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせん」という心の奥底からの嘆きは胸に詰まります。どうにもならない自分を見つめれば見つめるほどに、煩悩に縛られ悪業を作り続けるしかない我が身、生き死にを繰り返し苦界に沈み続けなければならない我が身、安楽な世界へ向かうなど無理難題と自覚せざるを得ない我が身を思い知らされるのです。つまり三学の道は閉ざされたということ。ならば、三学以外に救われる道はないかと苦しみもがくのです。私は、その悲しみの中で聖教に向かわれた法然上人のお姿を思うと涙が出ます。しかし、仏教は三学なのです。それ以外の道などありえないのです。三学以外

に救いを求めるなど言語道断。「私、法然のような者の心にかなう修行はあるだろうか」とさまざまな学者を訪ねても、誰も教えを示してくれる方はいません。いるはずがないのです。何度も言いますように仏教は三学なのです。解決のない道、出口のない真っ暗なトンネルを無謀にも進んでいるだけだったのです。実際はそれしかできなかったのかもしれませんね。

しかし、ついにその日を迎えました。善導大師（ぜんどうだいし）の著された『観経疏（かんぎょうしょ）』に導かれるままに、どうにもならない、罪作りの、そして三学など到底進めない者が、なんとお念仏をとなえることで誰もが救われる教えに出会われたのです。一心に弥陀の名号をとなえれば、必ず苦しみから離れ、阿弥陀仏がお建てになられた極楽浄土という安楽な世界に迎えていただけるというのです。阿弥陀仏の救いは、まさにすべての人を救済するという、末法という時と、修行を行い得ない器の者を見極めてくださった教えなのです。実は救われる道はあったのです。なんと浄土門の道は、はるか昔に阿弥陀仏により開かれていたのです。法然上人のその時のお喜びたるや、私には安易に語ることができません。「高声に唱て感悦随に徹り、落涙千行なりき」とお伝記では伝えています。

このどうにもならない煩悩に縛られ、修行など到底行い得ない愚かな存在のことを仏教では凡夫（ぼんぶ）と呼んでおります。先ほどの善導大師はもっと明確に「罪悪生死の凡夫」というお言

葉でお示しです。つまり罪をつくって六道輪廻する存在を凡夫とされていますが、皆さま、この凡夫が輪廻することなく、極楽浄土に迎えられる教えがお念仏なのです。

お釈迦さまは八万四千の法を説かれました。尋ねられるがままに説かれましたので、数えきれない法として伝わっています。どの教えも尊いのですが、自らの心としては、未来永劫にわたりどんな時代にあっても、誰もが救われる教えとして、ただお念仏だけが有効であるから阿弥陀仏にすがるよう説かれているのです。すでに私どもが行くべき道を指し示してくださっていたのですね。

こうして法然上人は、お念仏のみ教えを説き明かし、承安（じょうあん）五年（一一七五）春に浄土宗をお開きになったのです。本日、冒頭で拝読いたしました法然上人のご法語はまさに、法然上人が救われていく道として浄土宗を立てたみ心をいただくありがたいお言葉です。「この私、法然が浄土宗を立てたのは、罪悪生死の愚かな私という存在であるこの凡夫が、阿弥陀仏の報土、つまり極楽浄土に往生できることを示すためである」と力強く言い切っておられます。そこに強い意志を感じますね。そうです、自ら三学を修学し、三学を進められ、その器にないと自覚した法然上人だからこそ言えることです。いや、法然上人でしか言えないのですよ。もっと言えば、この私どもができないことをやられ、苦しんでくださり、人間そのものの本

質を見つめ、すべて私に代わって修行してくださったと理解したいものです。上人がこれまでの三学でしかなかった仏教を見直し、誰もが行ける道を自信をもって提示した、まさにお念仏宣言こそが「示さむためなり」の言葉に表れていましょう。それは弥陀、釈迦、諸仏に支えられた完璧な教えであります。

さて、ここで考えていただきたいことは、私どもはその凡夫という自覚がないのです。自分が愚かで修行の一つすらできないという考えすら持ち合わせていません。教えに出会わなければ往生したいと願う心など日常にないのが普通です。目の前の事だけに執着し、日々をやり過ごし、やがて死を迎えこのまま苦しみの世界から抜け出すことはできないのです。そうした私どもを憐れみ、救いの手を差し伸べようと、十劫という遠い遠い昔に、すでにお念仏を用意してくださったのが阿弥陀仏なのです。その救いに出会うためにも、法然上人は、まず我が身を信じなさい、自分の至らなさを信じなさい、地獄行き間違いなしと自分を見つめなさいと説かれます。凡夫たる愚者の自覚を持ち得た時、その凡夫のあなたを必ずや救うという阿弥陀仏の声が届き、阿弥陀仏のまなざしで守られ、明るい安楽世界への道が開かれるのです。あとはもう、お念仏を相続していくだけですとお諭しくださいます。凡夫が報土に往生できる教え、まさしく凡入報土、それが阿弥陀仏のお念仏なのです。

ところで、私どもは、日々「出会う」ということを積み重ねて生きていませんでしょうか。それは、人であったり、物であったり、出来事であったり、素敵な景色という場合もあるかもしれません。その出会いによって、これまでの人生が変わってしまったなどという話もよく聞きますよね。しかし、よき出会いとなるとそう簡単には巡ってまいりません。偶然という言葉では説明できないと思うのです。児童文学作家の中江嘉男（なかえよしを）さんという方がある対談の中で、出会いについて次のようなお話をされています。

「本当に出会うというのは、探し求めるというもっと能動的なものだと思うのです。じっとしていて出会う出会いは、出会いとはいえないと思うのです。（中略）出会った時に、その人が出会うことを求めていたかが問題なのです」

つまり、いくらそこで出会っていても以前からその出会いを求めていなければ、気付かずに終わってしまう、たとえ出会いのチャンスがそこにあってもそのことに気付かず、あっという間に通り過ぎてしまう感じでしょうか。

法然上人を思う時、まさにそのことに通じます。救いを求め苦しい修行に耐え、何年も一切経をひもとき、行を実践し続けても、何の手がかりもない日々。救いに出会いたくても出会えない苦しみ、焦り、恐怖、求めても求め得ぬ思いは言葉では尽くせません。しかし、つ

いに願いが通じるわけです。求め続けたからこそ、出会うことを求めていたからこそのお念仏との出会いでありましょう。この教えを何としてでも伝えていかなければならない、この私以外に誰がこの後、伝えてくれるのだという思いが、浄土宗を立て、伝えるのだという思いに結実しているのだろうと思います。そこを尊く受け止めることが大切です。

もう昔のことですが、こんな方がいらっしゃいました。原因不明の病気にかかり闘病生活を送るご主人を献身的に看病された奥さまが、暴言を吐いたり我儘を言うご主人に腹を立て、日々のストレスも重なり、愚痴ばかりこぼすようになりました。ご主人が辛いことはわかっているのですが、その時は自分のことしか見えなくなってしまったのでしょうね。しかしその後、ご主人が亡くなると奥さまは寂しくなり、愚かだった我が身に気付かれました。

私が「自らを見つめ、お念仏をとなえていきましょうね」と奥さまに伝えると、苦しかった気持ちがようやく晴れた様子でいつもの笑顔に戻られたのです。阿弥陀仏が見捨てず救ってくださる道があると信じ、ご主人の供養を通じてお念仏に精進されています。

人間というのは誰もが罪を作り続けていく存在です。自分は決して悪くなく、他人を指さしながら生きている存在です。それが凡夫なのです。それでも、大丈夫ですよと声をかけ、誰をも救いとるのが阿弥陀仏の慈悲です。これを生涯かけて伝えてくださった方がまさに法

然上人です。その法然上人を心からお慕い申し上げ、凡夫が極楽浄土に往生できる凡入報土の教えを尊くいただきお念仏をおとなえしてまいりましょう。（同称十念）

三、瓦礫をして変じて金と成さしむ

滋賀教区　西福寺　稲岡　純史

如来大慈悲哀愍護念　同称十念

無上甚深微妙法　百千万劫難遭遇

我今見聞得受持　願解如来真実義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人『選択本願念仏集』に示しく曰く、

「ただ心を回して多く念仏せしむれば　能く瓦礫をして変じて金と成さしむ」と。（十念）

（『聖典』三・『選択本願念仏集』、「第三　念仏往生本願篇」）

皆さん、こんにちは。本日は当山の法要にようこそお参りいただきました。どうぞお姿の方はお楽にしていただきまして、しばらくの間ご聴聞たまわればありがたく存じます。

柿も色付き、境内の木々にも秋の深まりを感じるようになりました。秋に結び付くさまざまな言葉がありますが、信仰の秋、お念仏の秋と、共々に信心が実りゆく秋になればと思います。

法然上人御作、秋の御詠歌には、

阿弥陀仏に　染むる心の　色に出でば　秋の梢の　類ならまし

（『法然上人行状絵図』三十＝『聖典』六・四八二頁）

と、秋の深まりと、我々のお念仏の信仰を、色にたとえて詠まれています。

日頃からお念仏をおとなえしておりますと、自身の至らなさや阿弥陀さまのお救いに目覚めて、次第に信心が深まっていくというのです。その心が染まっていく様子を、色に譬えたならば、春夏の青々とした木々が、多くの日差しを浴びて、やがて美しく色付く「秋の梢」のようであります、と詠まれているのです。

また、人間の能力や性格などの属性も、色で表すならば、赤や黄色の「秋の梢」のように、お一人おひとりの違いがありますね。それぞれの人生も実にさまざまであります。この世は、

楽しいこと幸せなことばかりではありません。思い通りに事が進まず、嘆くことや思わぬ病に襲われて、不運のどん底に陥ることもあるかもしれません。人生の彩りは、実に千差万別ではありますが、色付いた葉が、一生を終えて静かに大地に落ちていくように、我々の人生も、必ずこの世とお別れをする時がくるものです。

しかしながら、そのような無常なる人生であっても、誰でもお念仏をおとなえすれば、阿弥陀さまの大慈悲に包まれ、お浄土へ平等に救われていくという、この世と後の世への安堵の思いが、このお歌には秘められているように思います。

法然上人の生涯を顧みましても、さまざまな不安や悩みごとがあり、決して順風なものではありませんでした。ご幼少の時にご両親との別れ、晩年にはご配流の身になられるなど大変なご苦労がありました。比叡山での求道の日々では、お釈迦さまの八万四千という数多ある法門の中から、万人が救済されるみ教えになかなか辿りつけなかったことも、大きな悩みであったに違いありません。また、門下のお弟子さまに、お念仏のみ教えが正しく受け取られず、いわゆるお念仏の邪義が広まっていくことなどへの不安もあったことでしょう。さらに、自身の体調にもお悩みがあり、当時としては八十歳という長寿を全うされた法然上人でありますが、生涯にわたりご壮健であった訳ではありません。幾度となく持病の熱病に見舞

われ、生死の境をさまようことがあったのです。

まことに此身には　道心のなき事と病ばかりやなげきにて候らん　（『要義問答』）

と、その心の内が示されています。「道心のなき事」とは、法然上人特有のご謙遜としておくとして、特に、御年六十六歳の頃には、遺言状も書かれた記録がありますから、その病状は、大変深刻なものであったようです。そして、この上人の病状を重く受け止めた、先の関白九条兼実公が「後の御かたみにもそなへ侍らん」と懇請されて、著されたのが『選択本願念仏集』（以下『選択集』）なのであります。いわば、法然上人、今生の最後を覚悟された上で、記されたご遺訓にも匹敵する書物とも言えましょう。

源空が所存は、選択集にのせ侍り　（『法然上人行状絵図』四十五、第一段）

とあるように、法然上人のお念仏の教えの肝要を、余すことなく理路整然と示された、浄土宗の教科書のような書物が、この『選択集』なのであります。

ただ今、冒頭に拝読いたしました一節は、その中に記されたお言葉であります。

ただ心を回して多く念仏せしむれば　能く瓦礫をして変じて金と成さしむ

とあります。ただ阿弥陀さまに心を傾け、阿弥陀さまの在(ましま)すお浄土へお救いをいただきたいと、一心にお念仏をおとなえすれば、取るに足らない「瓦礫」、すなわち瓦や小石のような凡夫の私が、その身そのまま救いに預かる黄金の身となり、お浄土に生まれさせていただけるというのです。そして、どのような人も、阿弥陀さまの説法をお浄土で直々に聴聞して、やがて成仏し、あらゆる苦しみから解放（解脱）される、ということが示されたお言葉です。

その阿弥陀さまは、仏となる以前の修行の身であった法蔵菩薩の時代に、まるで親御さんが、一人の可愛い我が子を哀れみ慈しむように、生死流転する衆生に心を痛められ、そこですべての人を救いたいという、誓い（誓願(せいがん)）を起されたのです。そして、想像を絶する永い時間（兆載永劫）を経て、厳しいご修行の末に、ついにその誓いが成就して仏となられ（報身(ほうしん)）、今現に西方極楽浄土（報土(ほうど)）に在す仏さまなのです。そのご修行の功徳が、南無阿弥陀仏の六字の名号に、すべて込められ（万徳所帰(まんとくしょき)・万徳無漏(むろ)）、我々にとなえさせようとさ

れたのです。それはお念仏が功徳の詰まった優れた行というだけでなく、時も場所も選ばない、誰でも修することができる易しい行（最勝最易）であるからです。阿弥陀さまの以前の願いが成就した、本願のお念仏なのです。その本願が成就したからこそ、瓦礫のような智慧に暗い凡夫であっても阿弥陀さまの最高の極楽浄土に往生できるというのです。

では皆さんは、自分のことを値打ちの無い「瓦礫」のような存在だと信じているでしょうか。それは、この世に生きる他人と、さまざまな価値や知識、教養や経験を比較して、人間の優劣を判断するのではありません。阿弥陀さまという鏡に、飾らない自身の本当の姿を映し出し、その眼差しにより、我が心、我が身が見透かされた私をいうのです。仏の鏡に映し出された我々は、当に「瓦礫」の如く、自身でさとりを得る器でもなければ、仏になれる力もありません。凡夫の一人ひとりなのではないでしょうか。

法然上人がご修行なされた比叡山は、天下の法城といわれ、全国津々浦々の天才、秀才のエリートが目指したお山でありました。そのお山で、「智慧第一」「多聞広学」「ただ人にあらず」など、非凡な才能を、万人から評価された法然上人ではありましたが、所詮、これらの称号も、この世の人間が形容した評価に過ぎないのです。仏さまの視座で、自身を深く洞察された法然上人は、

我が心に相応する法門有りや。我が身に堪えたる修行や有る

（『法然上人行状絵図』六＝『聖典』六・六二頁）

と、真摯な我が姿、力の限界を、謙虚に吐露されています。やはり、人知を超えた大いなる力（本願力）に縋る外、法然上人ご自身が、そしてご両親も、延いては万人が救われる術が見つからなかったのでありましょう。それでも智慧の眼を開き、自身を深く見つめられた末に、本願のお念仏によって凡夫が救われて行く道に、辿りつかれたのでありました。

秋を代表する色付いた柿も、時がくれば地に落ちていくことでしょう。中国から伝えられたという柿は歴史が古く、柿にまつわることわざも多く残されています。

「青柿が　熟柿を弔う」とあります。枝に残った青柿が、先に落ちて行く熟柿を弔っているが、やがて、その青柿も熟柿となって落ちていかなければならないということです。枝に残ったからといって不安がない訳ではありません。この世も同じではないでしょうか。如何なる災難に遭って、突如命を奪われることがあるかは知りようがありません。しかし、そのような無常の中にも、お念仏にご縁のある我々は、落ちていく先、生れていく先（お浄土）

が定まっているということは大変ありがたいことです。

この言葉の深意は、青柿も、何れ地に落ちる時が訪れることから、熟柿共に同じ運命で、お互い大した違いなどないことを譬えているのです。つまり、人のことをあれこれ批判するという、自身の愚かさを戒める言葉なのです。また「渋柿の　渋そのままの　甘味かな」と詠まれているように、渋柿は渋を抜いて甘くなったのではありませんね。天日に照らされ厳しい木枯らしに晒され、柿の中に含まれるタンニンの働きで、そのままその渋を甘味に変えていくのです。仏さまの前で、深く、深く我が身を見つめた時に、この自分の心根は、まさに柿渋の如く、仏さまに褒められるようなものではありません。ちょっとしたことに心乱れてしまいますし、欲の心も抑えることができません。まさに、

煩悩は身に添える影、去らんとすれども、去らず（『念仏往生要義抄』）

と、示されるように、救われようのない我々なのです。冒頭のお言葉、

ただ心を回して多く念仏せしむれば　能く瓦礫をして変じて金と成さしむ

とは、そのような人間であっても、「ただ心を回して多く念仏せしむれば」と、お念仏をおとなえしたならば、日に照らされた柿渋が、そのまま甘味となるように、「瓦礫」のような煩悩まみれの凡夫のこの私が、慈悲の光に照らされ、そのまま救われる身とならせていただけるのです。お念仏のみ教えは、湧き起る煩悩の火を消しなさい、というのではありません。煩悩を抱きかかえた凡夫のままに、ただ心を阿弥陀さまに傾けて、南無阿弥陀仏とお念仏を申せば、お浄土へ生まれさせていただけるのです。「瓦礫」のような存在の私を、阿弥陀さまは哀れんで、「金と成さしむ」と示されているように、「必ず救ってあげますよ」と救いのみ手を差し伸べておられるのです。本当にありがたいことであります。

私が長くご縁をいただき、お話しさせていただいたお寺さまがあります。その参詣者のご婦人からある時、一通のお手紙を頂戴いたしました。それは、自身の半生と、特に、姑さんの晩年の介護について、実に美しい文字で、丁寧に記されてありました。

このご婦人が嫁がれたそのお家は、代々続く大きな商家であり、傍で仕えたお姑さんの人生は、まさに、苦難と忍耐の連続であったようです。しかし、どのような辛い中でも、自身のことはいつも後回し、夫を支え、家族や商売を守るために、寝る時間を割いて懸命に働き

通された方でありました。ご苦労の多かったお姑さんは、やはり、一本筋の通った女性の根性のようなものが備わっていて、このご婦人と何度も衝突されたそうです。

何事もすべて器用にこなされる気丈なお姑さんでしたが、やはり年波には勝てず八十三歳の折、ちょっとしたお布団の段差に躓き、大腿骨を骨折されてしまいます。年齢のこともあり手術に耐えられる体力があるのか、大変心配されましたが、手術は成功し無事帰宅されました。しかしながら、その後の自宅療養の中で、次第に体力が衰え、しばらくしてついに寝たきりの身となり、それ以来、このご婦人の介護が始まったのです。

晩年、毎日の着替え、身体のお手入れなど、毎食付きっきりのお給仕がございました。およそ三年余り経過したある日の夕刻、静まり返ったお姑さんの寝室で二人きりになって、いつものように夕食のお給仕をされていました。衰弱したお姑さんの口元に、繰り返し誤飲をしないように、好物のジュースを運んでおられた、その時です。「お姑さんの介護をしているというよりは、まるで仏さまへのお給仕をしている」という、これまで感じ得なかった不思議な思いにふと気付かれたのです。思わず、「お姑さん、上手に飲んでくれてありがとう」と、お礼を言われますと、お姑さんは童女のように優しく微笑まれたようです。

その時、その一所懸命、飲もうとするお姑さんのお姿をご覧になって「生きることの大切

さ」「許すことの大切さ」「人間の愚かさ」という、仏さまからのお諭しのような、不思議な思いに包まれたとのことでした。「愚かで弱い人間が、なぜか愛おしく見える瞬間であった」と、お手紙にはその時のお気持ちが記されておりました。お姑さんと差し向かい繰り返されるお給仕を、ご婦人は、何か神々しい神聖な空間に身をおいているように感じられたのでありました。お姑さんの振る舞いが、あたかも、我々に注がれる阿弥陀さまのお慈悲の眼差しのように捉えられているのです。

我々人間は、何か大いなる力の前に額(ぬか)ずき、自身を深く見つめたときに、初めて自身の非力、愚かさに気付くのではないでしょうか。まさにお姑さんは、ご婦人にとってその存在であったのです。お姑さんの口癖は「私が亡くなったら、何もしなくていいの。ただお経さんをお上げして欲しいの」でした。仏壇の前でお念仏をおとなえすることが出来なくなったお姑さんは「もったいない」と、いつも布団の上から手を合わせて、常に、お念仏を申されていたのです。最期、自宅での臨終を迎える際は、実に穏やかで苦しむことなく「おおきに」と、介護を尽くしたご婦人を見つめて、目を閉じられたのです。享年八十七のご生涯でありました。ご婦人は「信仰に生き、充実した人生を生き抜いた、お姑さんの確信の意志表示」であったと受け取られています。

母よりも　姑との長き年月の　風のつめたさ　風のやさしさ

商家に嫁し　只ひたすらに　はげみし姑　終生指に　光るものなし

と、ご婦人の実母とは、また違った温かみのあったお姑さんへの思いを二首の和歌に込めて、お手紙に認められてありました。色々意見の衝突もあったそうですが、介護を尽くして許してもらおうと、精一杯のお世話をされたようです。

「もう一度、車椅子にのせて散歩してあげたかった」という思いはかないませんでしたが、今は、「親孝行が足りなかった分を反省する、埋め合わせの毎日を送っています」と記されてありました。そして最後に「お念仏を忘れなかったお姑さんに習って、これからもお念仏を申させていただきます」と、ご婦人自身のお誓いのようなお言葉で、そのお手紙が括ってありました。

法然上人は、愚かな本来の我が身を曝け出し、お念仏を申しなさい、とのお導きであります。どのような人生であっても、どんなに落ち込んでも、行き詰まってもいいから、その身

そのままお念仏を申していきなさい、とお教えいただきました。阿弥陀さまの目から見た我々は、とてもさとりを開いたり、この世で仏になれるような器ではありません。罪根深き、欲塗(まみ)れの、柿渋一杯詰まった凡夫なのであります。

そのような我々に、「ただ心を回して多く念仏せしむれば」と、救われようのない凡夫のこの私が、南無阿弥陀仏とお念仏を申したならば、必ず本願力の光に照らされ、「瓦礫」のような非力のこの私が、「金」色の救われる身と変じて救済に預かり、やがて仏とならせていただけるのです。

このお念仏による救いに一条の光を見出された兼実公は、

殿下(でんか)、ひとえに念仏門に入り給いにし後は、浮生の栄耀を軽くして、往生浄土の御(おん)営み、他事(たじ)無かりき（『法然上人行状絵図』十一＝『聖典』六・一二六頁）

と、栄華を捨てただ往生極楽を求められたと伝えられています。まさにお念仏に生きた関白でありました。

現代に生きる我々も、いかなる不運に見舞われようと、強く生き抜く正しい信仰に、精進

していきたいものです。これからも阿弥陀さまをお慕い申し上げ、法然上人のお念仏に巡り合えた悦びと共に、お念仏に一層心掛ける日々を、送って参りましょう。

本日のご縁、誠に尊く思いました。ありがとうございました。最後に、十遍のお念仏をおとなえさせていただきます。（同称十念）

四、心はおなじ花のうてなぞ

佐賀教区　光明院　中岡　健雄

如来大慈悲哀愍護念　同称十念

無上甚深微妙法　百千万劫難遭遇

我今見聞得受持　願解如来真実義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く、

「信謗（しんぼう）ともに縁として、先に生まれて後を導かん。

引接縁（いんじょうえん）はこれ浄土の楽しみなり」と。（十念）

（『元祖大師御法語』後篇　第二十九章）

みなさま、ようこそお参りくださいました。誠にありがとうございます。

鮎は瀬に着く　鳥は木にとまる　人は情けの下にすむ

と申しますが、新型コロナ感染対策のために私たちの生活様式は大きく変わりました。人と人との間に距離が置かれ、交流の場はもちろん、親族でさえも集まりにくくなり、人の絆や心のよりどころとする諸行事の開催もずいぶん難しくなりました。

コロナ禍で夏休みの楽しみだったお子さんやお孫さんたちの帰省も叶わず、寂しいお盆をお過ごしになった方もいらっしゃったことでしょう。

盆提灯　出しては子らの　笑顔待つ

あるいはお仏壇の盆飾りの前で、子どもやお孫さんたちの笑顔を思い、せめて「来年のお盆にはみんなで賑やかに過ごせますように」と、送り火の日に願い事をしてご先祖さまをお浄土へ送られた方もいらっしゃったことでしょう。

盆提灯　仕舞うて父母に　手を合わす

あるいは日ごろ慌ただしく過ごしている私たちの一年の折り返しとともに大切な夏の行事であるお盆にこれまでを振り返り、これからの人生を思うなど、考え深く過ごされた方もいらっしゃったことでしょう。

あるお檀家さんがこのようなことをお話されていました。「自分が死んだ後はどうなるのだろうか。私は寂しい思いをせずにちゃんと過ごせるのでしょうか」と。お盆とは死後の不安を考える時期なのかもしれませんね。

こんな時に思い浮かぶのが、

信謗ともに縁として、先に生まれて後を導かん。引接縁はこれ浄土の楽しみなり。

との、法然さまの励ましのお言葉です。

このお言葉をよりどころに、私は決まって

「大丈夫ですよ。お浄土に往ったら忙しいんですよ。引接縁といって娑婆に残してきた人

たちをお浄土へ導く仕事がいっぱい待っていますよ。それは一人でするのではなく、阿弥陀さまのお力をいただいての仕事です。親しい人をお浄土に迎える明るい生活が待っていますよ。それをお浄土での楽しみと法然さまが励ましていらっしゃるんですもの。お念仏をおとなえしてその時を思い、明るくいきましょうよ」

とお檀家さんを励ましています。このお言葉は、法然さまが京の都を離れることになったおりに別れを惜しむ親しい方（九条兼実）を励まされたときのものです。

そうです。お念仏は、死してもなお楽しみが待っている世界、西方のお浄土で親しい人と再会する教えでもあるのです。残される方、これから逝かれる方の双方が、お浄土での再会に対して希望を抱いて、今を明るく乗り越えていく教えなのです。

ですから、日頃皆さまがお子さんやお孫さんを心配し、時として力を貸して支えていらっしゃるように、お浄土からもその気持ちそのままに、仏さまと一緒になって縁ある人を支えていくことにもつながっています。大切なことは、未来の浄土での引接縁の楽しみは、お念仏をとなえる日暮らしの中から芽生えることです。そしてお浄土での再会を願い合えるような関係を築く努力が大切なのではないでしょうか。

そうは言っても、お檀家さんからは「なかなかそんな心境にはなれませんよ」とかえって

きます。もちろん、それでいいのです。そんな心境になれないからこそ、私たちはただただお念仏をとなえるのです。人は誰でも日々の暮らしのなかで、人間関係に悩み、いろいろな苦楽が入り混じります。苦しみと楽しみ、不安と安心が入れ替わり立ち替わり。人生は安心と心配の繰り返しです。

法然さまは、苦しみ悩みを解決するより先に、たとえ謗る心であっても、お念仏をとなえるご縁にしましょうと、まずお念仏を申すことを第一に勧められています。信じる心から出たお念仏の声も、謗る心から出たお念仏の声でさえも、受けとめ聞き届けてくださるのが阿弥陀さまです。平等に救いたいと願っていらっしゃる仏さまなのです。

「そんなお前でよい。どんな心境心情であっても我が名を呼べ。まず南無阿弥陀仏と呼べ」と、私のお念仏の声を待っていてくださる阿弥陀さまが、極楽のお浄土にちゃんといらっしゃることに大きく励まされます。

「救いたい」と願う阿弥陀さまと、「どうぞお願いします」という私の願いが、まさしく行き交う教え。そこに親子のような関係が成り立つ大きな安心を感じます。

私を指導してくださった師僧は、自身が余命宣告を受けた闘病生活の最中に、

死して良し　生きてまた良し　極楽の　弥陀のみむねに　抱かる嬉しさ

と、念仏信仰の心境心情を歌にして教えてくださいました。

目の前の苦しみが無くなるのではなく、苦しみの中にもお浄土からの引接縁の働きをいただき、またそのことで未来に光を見いだしてお詠みになった歌であろうと思います。

また、師僧はこんなこともおっしゃいました。

「あの人にお尋ねしたい、あの方のお力を借りたいと思えば、そこまで出向いてお願いをしなければいけないが、その方がお浄土にいらっしゃるならば、いつでもどこでも南無阿弥陀仏と願い頼って接することが出来る。そう思えることが力となり、今の私の安心感ともなっていて、闘病生活の不安な心を力強く、また大きく支えてくれる」

また、「近頃ことさら思うのは、治らぬこの病で、人生の一大事の中で、南無阿弥陀仏とみ仏さまにお念仏を申していると、仏さまはもちろん先立ったなつかしい父母たちが、歩く私を後ろからそっと押して支えていると感じるんです」と次のお歌も教えてくださいました。

親思う　思いも親の思わする　思いと知って　親思うかな

こういう心の通い合いがいただけるのは、西方に極楽浄土があってのことです。

そのお浄土は阿弥陀さまが苦しむすべての者を必ず救い、心安らぐ世界に導きたいと、大きな願いを持って永い永いご修行の末に、構えてくださっている仏の世界なのです。

その事を法然さまは、少し難しい言葉ですが、

我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり

（『法然上人行状絵図』六＝『聖典』六・六五頁）

と、誰もが浄土に生まれて往く――この教えを広めることが浄土宗を立てる目的だとはっきり宣言なさっています。このみ教えを、「凡入報土」と申します。やがて私たちも必ずお浄土に生まれ、今度は残された人々を導く仕事を果たすのだと受けとめて明るい未来に向かってまいりましょう。この「凡入報土」の教え、また「引接縁」の教えが励ましとなり、私は四年ほど前に、七十九歳の母を安心してお浄土に送ることができました。

母がお浄土に旅立ったのは四月の桜の花が満開のときでした。そのときは私の兄弟家族全

員が集まり、母の周りを十五、六人が取り囲み見送りました。途切れ途切れの呼吸になった母の枕元で、一人ずつお礼とお別れの言葉を伝えて、最後に善導さまの『発願文』をおとなえして、母の呼吸に合わせるようにみんなでゆっくりゆっくりお念仏をとなえました。

誰もが涙を流しながらのお念仏でありましたが、母の往く姿に神々しさを感じました。まるで見送る私たちのほうが旅立つ母の最期の姿に勇気づけられているような不思議な感覚でした。こんなお別れができたのも、法然さまのみ教えのままに「この世の別れが最期ではない。先に往く母も見送る私たちも、時間の違いこそあれ必ず極楽のお浄土に生まれて往くんだ」と、また「母はお浄土に生まれたならば、私たちに必ず『引接縁』の働きかけをしてくれるに違いない」と、母も私たちも双方が深く信じて疑っていなかったからです。

母が好きだった、

生まれては　まず思い出ん　古里に　契りし友の　深きまことを

との法然さまのお歌が思いおこされました。

母は八年前に悪性リンパ腫と診断されて治療をしていました。この間、時々は腫瘍の転移

による治療もありましたが、幸い命の縁に恵まれて、体調を気遣いながらも年に一、二度は旅行にも出かけるほどで、比較的自由な老後を楽しんでいました。この病気の後は、むしろ時を惜しむように兄妹旅行や詠唱仲間との旅行を自分が計画するほど積極的になりました。最後は腎臓に大きな腫瘍が見つかり、手術摘出も検討されましたが、これまでの数回におよぶ抗がん剤や放射線治療の繰り返しで、手術には耐えられない身体となっており、投薬での入院治療が始まりました。

その治療から一ヵ月が過ぎたころです。「私、もう退院する」と母が言い出しました。しかも退院日を自分の誕生日と決め、「投薬治療なら在宅でやりたい」と病院に願い出て退院しました。そして亡くなる二ヵ月ほど前、薬の処方での受診に、たまたま私が母に付き添ったとき、「もう薬はいらないと先生に言ってよ」と母が突然言いました。「いらないってどうして」と聞くと、「もう覚悟はできている」と言うのです。予想もしない、あまりにも唐突なことでした。考えてみると、このころは食欲もなく、なによりも数種類の薬を飲むのも苦痛の様子でした。真剣に頼む母を見て、「わかったよ。先生に相談してみるよ」と答えるのが精一杯でした。先生も母の気持ちを理解してくださり、薬は痛み止めの一錠のみとなりました。

あえてさらっと母の口から出た「覚悟している」の言葉が私の心に響き、受信後、二人がいる待合室がシンとした空気になってしまい、私はたまらず、「じゃあさぁ、お母さん。覚悟しているんだったら、兄弟や孫たちを集めようか」と少しおどけた声で尋ねました。「いや、それはまだちょっと早い」と笑ってくれた母の言葉で場の空気がなごみました。そんなこともあり、私たち家族は近いうちに訪れる母との別れの心の準備が少しずつですが、出来たのだと思っています。それは稀有なことでした。母は私にありがたい教えを体験させてくれました。

死の縁は無量と申します。もちろん「何処で?」「何が原因になるか?」人智を超えたことですから、誰もが願ってもなかなか思い通りにはなりません。しかし、どんな最期であろうとも、お浄土からの迎えに導かれて生まれて往くことは間違いないことです。

母を見送ったあと、自らの食事内容などを書き込んだノートが見つかりました。その中には食べた物だけでなく、「今日は誰々とどこに行った」「夕飯は誰と何々を食べて楽しかった」「今日の病院の付き添いは誰々だった」など、雑感交じりのその時の思いをつづった記録が詰まっていました。それは日記のようでもありました。ノートには、法然さまの『一枚起請文』の書写、そして先に亡くなった母の両親のお戒名も書かれていました。それらを認(したた)

めながら、病室の母は何を思ったのでしょうか。目には見えず、肌身に感じることではなかったでしょうが、母を案じた阿弥陀さまの導きと、きっと亡き父母たちからの引接縁の働きが母の身に及んで、仏さまの力をいただいて病気と向き合いながら生き方や処し方を思案したんだろうなぁと、胸が熱くなりました。

もちろん別れは悲しみきわまりないですが、お浄土に生まれて、今度は必ずそこから母も導いてくれると確信できるこの教えに支えられたからこそできた看取りでした。

受けとめる　大地のありて　椿落つ

大地が椿を育て、落ちる花をもまた大地がしっかりと受け止めてまた育んでくれる。大地の受けとめに安心して椿が咲いていると眺めれば大変味わい深いものです。その大地は、過去も現在も未来も、そこにあってすべてに働きかけをしています。

そして私が間違えぬように迷わぬように、必ず往き生まれることのできる極楽浄土を阿弥陀さまが構えて待ってくださっているのです。法然さまはそのことを「凡入報土」とお示しくださいました。そしてそのお浄土から、娑婆世界に残してきた人々を導くことができるこ

とを、引接縁は楽しみ――と教えてくださっています。
ただし一番大切なのは、そのお浄土に往き生まれることをいま喜べることです。

後の世も　この世も共に　南無阿弥陀　仏任せの　身こそ安けれ

（同称十念）

令和３年度 布教羅針盤
凡入報土 —— 救われていく道
宗祖のみ心

令和３年４月１日　発行

発　　行　浄　土　宗

〒605-0062　京都市東山区林下町 400-8
TEL（075）525-2200(代)
FAX（075）531-5105

〒105-0011　東京都港区芝公園 4-7-4
TEL（03）3436-3351(代)
FAX（03）3434-0744

発 行 人　川　中　光　教

編　　集　浄 土 宗 教 学 部

編集協力　浄土宗出版

〒105-0011　東京都港区芝公園 4-7-4
TEL（03）3436-3700
FAX（03）3436-3356

印　　刷　（株）共立社印刷所

表紙デザイン　藤原印刷株式会社

浄土宗宗務庁

©Jodo Shu, 2021　Printed in Japan
https://jodo.or.jp/

浄土宗